

4 副学籍による交流教育の事例

(1) 特別支援学校（視覚障害）児童の交流教育

1 副学籍による交流教育の開始

- ・小学部入学児童のAさん及びBさんの保護者から、副学籍の「案内リーフレット」を見て、居住地域の小学校と副学籍による交流をしたいとの希望があった。特別支援学校は希望児童について教育委員会に連絡し、その後、教育委員会から送付された「指定通知書」を保護者に手渡した。
- ・保護者と特別支援学校との話し合いの結果、学校生活に慣れた6月から、月1回（水曜日）交流を開始することとし、両校が協議を行った後、「副学籍による交流教育計画書」を双方で作成し、これを教育委員会に送付し、交流教育を開始した。

2 実施のための事前準備や配慮など

事前打ち合わせ

- ・特別支援学校担任が副学籍校を交流開始前に訪問し、本児の障害等の状況、通学方法、学習等の状況、保護者の願い等について説明した。また、学校内を見学し、特に本児の予測される活動場所を見た後、交流時に必要となる配慮等について確認した。

「交流教育計画書」の作成

- ・その後、両校の学校行事や本児の個別の教育支援計画と照らし合わせながら「交流学習」の確認、初回の日程や学習内容等について確認し、「年間の交流計画書」を作成した。
- ・最初の交流日には、学級担任が本児、保護者とともに学校に行き、全校集会の際に双方の担任が本児を全児童生徒へ紹介した。

交流教育推進の窓口

- ・小学校では、特別支援教育コーディネーターが交流教育の窓口となり、毎月開催される校内委員会を活用して、交流学級の決定や実施状況の報告や協議を行っている。
- ・特別支援学校では、担任が学部会において交流状況を定期的に報告し、交流内容や児童の状況、支援の方法などについて協議し、内容の改善に努めている。

学校だより等の提供

- ・小学校の学校だよりや行事のお知らせ等については、交流時等に確実に本人・保護者に配布するようにするとともに、両校がお互いの学校に送付することとし、情報の共有に努めている。

その他

- ・小学校担任が特別支援学校の文化祭などを参観し、児童の在籍校での活動の様子を把握し、その様子を交流時に学級の児童に紹介した。

3 小学部AさんとBさんの交流教育の様子

- Aさんは、両眼視力が0.04で視野も狭く、日常生活ではかなり見えにくいですが、活発に行動している。Aさんの見やすい位置に特別支援学校（視覚障害）から搬入した傾斜机を置いている。
- 黒板には板書の文字を探す手がかりとなるように目印の「花」を付け、また板書をする際には、読み上げながら書くように配慮してもらっている。授業中は単眼鏡を使用しているが低学年の時期はまだ操作が難しく、見ようとしても探せない時もあった。
- 授業は副学籍校の教育課程が基本であるが、事前に特別支援学校（視覚障害）担任及び保護者に学習予定等が連絡され、当日になって困らないような配慮がされている。
Aさんは教師や友だちの話をよく聞いて内容を理解し、挙手をしたり発言をしたしている。学級の子どもたちは、中学年の時期にはAさんの見えにくさがある程分かっていて、「単眼鏡で見たら」と言ったり、「今はここを読んでもよ」と教科を指し示したりすることもあった。また、Aさんのルーペや単眼鏡を実際に見せてもらうなどして、視覚補助具に興味を示す場面も見られた。Aさんは、休み時間は絵を描いて過ごすことが多いが、周りに集まった友だちに「うまいね、色もきれいなどと誉められ、とても楽しそうに過ごしていた。
- 学級の児童と地域ですれ違っても、本児自身は見えにくさのため、気づかないことも多かったが、交流を開始してからは学級の子どもから声をかけられることが多くなってきた。また、地域の行事への参加も積極的になってきたと両親も感じている

- Bさんは全盲であるが、周囲の状況を説明すると、自分なりにイメージして状況を捉えることができる。授業では視覚的な情報も多く、耳からの情報だけでは、学内容を理解するのは難しかったので、付添の担任が横で指導したり、保護者が支援したりすることもある。
- 集会活動では、上級生や学級の友だちの援助もあり、活動を楽しんでいる。音楽の授業は本児が特に好きなこともあり、よく澄んだ声で歌ったり、得意なりコーダーをソロで演奏する場面を設けてもらったりして、楽しく参加している。
- 休み時間は遊びに誘う友だちも多く、一緒に話をしたり、校内を歩いたりして楽しく過ごしている。ぶつからないか、ハラハラすることもあるが、周囲の子どもたちは上手に接してくれる。先生によると本児と一緒に学んだ経験のある子たちは、他者への優しさや思いやりの心が確かに育っていることを感じるとのことである。
- Bさんの副学籍校では、毎年クラス替えがあったが、担任の先生方は配慮すべきことをきちんと受け継いでくれており、年度初めの交流でも戸惑うことはなかった。

二人とも特別支援学校（視覚障害）と副学籍を置いている小学校の卒業式の日程異なっており、副学籍校の卒業式への参列を希望した。参加の仕方について、両校と保護者が連絡を取り合い準備をすすめた上で、交流教育修了の証として卒業式に参加した。

(2) 特別支援学校(聴覚障害)児童の交流教育

1 副学籍による交流教育の開始

- ・校内で3月に副学籍の説明を聞き、さらに「案内リーフレット」を見た小学部1年児童のCさんの保護者から、2年生から居住地域の小学校と副学籍による交流をしたいとの希望があった。特別支援学校は希望する児童について教育委員会に連絡し、その後、教育委員会から送付された「指定通知書」を保護者に手渡した。
- ・保護者と特別支援学校との話し合いの結果、学校生活に慣れた5月から、月1回程度(水曜日)交流を開始することとし、両校が協議を行った後、「副学籍による交流教育計画書」を双方で作成し、これを教育委員会に送付し、交流教育を開始した。

2 実施のための事前準備や配慮など

事前打ち合わせ

- ・特別支援学校担任が副学籍校を交流開始前に訪問し、本児の障害等の状況、通学方法、学習等の状況、保護者の願い等について説明した。また、学校内を見学し、特に本児の予測される活動場所を確認した後、交流の際に必要な配慮等について具体的に説明した。

交流教育計画書の作成

- ・その後、両校の学校行事や本児の教育の教育支援計画と照らし合わせながら「交流学級」の確認、初回の日程や学習内容等について確認し、年間の交流計画書を作成した。
- ・最初の交流日には、学級担任が本児、保護者とともに学校に行き、全校集会の際に両校の担任が本児を全児童生徒へ紹介した。

交流教育推進の窓口

- ・小学校では、特別支援教育コーディネーターが交流教育の窓口となり、毎月開催される校内委員会を活用して、交流学級の決定、実施状況の報告や協議を行っている。
- ・特別支援学校では、担任が小学部会において交流状況を定期的に報告し、交流内容や交流時の児童の状況、在籍校からの支援の方法などについて協議し、内容の改善に努めている。

学校だより等の提供

- ・小学校の学校だよりや行事のお知らせ等については、交流時等に確実に本人・保護者に配布するようになるとともに、両校がお互いの学校に送付することとし、情報の共有に努めている。

その他

- ・小学校担任が特別支援学校の運動会などを参観し、児童の在籍校での活動の様子を把握し、その様子について交流時に学級の児童に紹介した。

3 小学部Cさんの交流教育の様子

- Cさんは、重度の聴覚障害があるため、両耳に補聴器を装用している。特別支援学校内では、手話・指文字も含めた多様なコミュニケーションモードを利用しているが、口話法も身に付けており、静かな場所での一対一のやり取りならば、意思疎通は概ね可能な状況にある。教室では、一番前の席では視覚的な情報を逆に得にくくなるため、周囲の子どもたちの様子も把握しやすい3列目の窓側にしてもらった。これは、逆光では話者の口元が見にくくなるためである。
- 担任は、板書しながら説明することも以前は多かったが、最近話をするときには、本児の方に顔を向け、文節毎に少し区切るように明瞭な声で話しかけるように心がけている。また、事前に用意できるものは、文字や図表にしておくなど、Cさんが視覚的に理解しやすいようにしている。このような配慮はやや理解に時間がかかりがちな子どもたちにとっても分かりやすいとのことで、本児が交流していないときも継続している。
- 授業は副学籍校の教育課程が基本となっているが、事前に特別支援学校担任及び保護者に学習予定等が連絡され、当日になって持ち物や準備に困らないような配慮がされている。また、保護者との家庭学習では、翌日の学習の際にキーワードとなるいくつかの言葉について確認をし、読話が可能になるようにしている。
- Cさんは教師や友だちの話をよく見聞きして内容を理解し、挙手をしたり発言をしたりしている。学級の子どもたちは簡単な手話や指文字をCさんから習い、周囲の子どもが使っている場面も多くなってきた。また、子どもたちはCさんの補聴器には興味を持っていたが、特別支援学校担任が「Cさんの聞こえ方」という話を学級で分かりやすくしてくれてからは、とても大切なものであることがよく理解できたようである。
- 休み時間は友だちと元気よく校庭で縄跳びをしたり、教室で話をしたりするなど、とても楽しそうに過ごしており、放課後の約束をすることもたびたびある。
- 交流を始めてからは、地域ですれ違っても、本児が気づかないでいると、ポンと肩を叩いて合図してくれるなど、小学校の子どもから自然に声をかけてくれることが多くなってきた。また、特別支援学校からの帰宅後、学級の子どもたちと遊ぶことや、地域の行事への参加も積極的になってきたことを両親も感じている。
- 付添については、当初は担任と保護者が協力して行ってきたが、本児には5年生の兄がおり、登校も集団で行っていることから、何度かの確認ののち、現在は保護者が付き添わないこともある。
- 小学校の担任によると、本児と一緒に学んでいる子どもたちは、他者への優しさや思いやりの心が確かに育っており、また、発表や説明をする際には、本児がいないときでも、相手の顔をきちんと見て、聞き手が分かるようにポイントを押さえた話し方ができるようになっているとのことである。
- 小学校では、毎年クラス替えがあるが、担任の先生方は配慮すべきことをきちんと受け継いでおり、年度初めの交流でも戸惑うことは余りなかったようである。秋の校外学習への参加についても、現在、両校の担任と保護者を中心に検討を始めている。

(3) 特別支援学校(知的障害)児童生徒の交流教育

1 副学籍による交流教育の開始

・小学部2年生のDさん及び中学部1年生Eさんの保護者から、居住地の小・中学校と交流をしたいとの希望があった。在籍校において「個別の教育支援計画」等をもとに、交流の必要性や内容について保護者との話し合いを行った。その結果、Dさんについて、副学籍校で可能な内容を検討し、在籍校と具体的な計画を立案することになった。両校が協議を重ねた後、「副学籍による交流教育計画書」を双方で作成し、これを教育委員会に送付し、交流教育を開始した。

2 実施のための事前準備や配慮など

事前打ち合わせ

・在籍校担任が副学籍校を交流開始前に訪問し、Dさんの障害等の状況、通学方法、学習等の状況、保護者の願い等について説明した。また、学校内を見学し、特にDさんの主な活動場所を見た後、交流する時に必要となる配慮事項等について具体的に確認した。

交流教育計画書の作成

・その後、双方の学校行事や個別の教育支援計画と照らし合わせながら、「交流学級」の確認、初回の日程や学習内容等について確認し、年間の交流計画書を作成した。
・最初の交流日には、学級担任がDさん、保護者とともに学校に行き、全校集会の際に双方の担任が本児を全児童生徒へ紹介した。

交流教育推進の窓口

・小・中学校では、特別支援教育コーディネーターが交流教育の窓口となり、毎月開催される校内委員会を活用して、交流学級の決定、実施状況の報告や協議を行っている。
・在籍校では、担任が学部会において交流状況を定期的に報告し、交流内容や児童生徒の状況、支援の方法などについて協議し、内容の改善に努めている。

学校だより等の提供

・小・中学校の学校だよりや行事のお知らせ等については、交流時等に確実に本人・保護者に配布するとともに、両校がお互いの学校に送付することとし、情報の共有に努めている。



3 小学部Dさん、中学部Eさんの交流教育の様子

- Dさんは、中程度の知的発達の遅れがあり、さらに自閉症と診断されている。就学前から地域療育センターにおいて、療育指導を受け、比較的情緒的には安定した学校生活を送っている。手たたきなどの常同行動は見られるものの、少人数の活動場面では、課題への取組意識も育ってきている。
- 副学籍校における交流は、個別支援学級において実施することになった。当該校の個別支援学級は、児童6名、担任2名の構成であるが、このうち軽度の遅れの児童が4名で、言葉による指示がある程度可能であり、明るく活発な学級である。
- Dさんは隔週で1回、午前中2時間の授業と給食に参加することになった。授業は学級全体で取り組める内容を計画的に設定した。学級の児童には、担任がDさんのできそうなことについて事前に説明を行い、歓迎する気持ちを育てて迎えた。
- 自閉症ということもあって、当初は登校後すぐに不安定になってしまった日もあったり、耳ふさぎや奇声を発することもあったが、保護者がいることで、何とか落ち着きを取り戻した。交流開始から3ヶ月を経て、最近ようやく学級の子どもたちにも慣れ、活動に少しずつ参加する場面が増えてきた。
- 学級の子どもたちも、Dさんの反応を常に気にしているが、接し方に苦慮している様子がうかがえる。しかし、子どもたちなりに接する中から、Dさんの様子を見ながら、どう声をかければよいか、そのタイミングなどについて、学び始めている。
- Dさんも、抵抗なく教室に入れるようになり、自分からの積極的な働きかけはまだ少ないものの、自分の居場所と認識し始めているようである。

- Eさんは中学部の1年生。重度の知的障害があり、生活介助を要する生徒である。今回の交流では、保護者が普通学級での交流を希望していることもあり、行事場面での交流を計画し、体育祭への見学参加と文化祭への展示見学参加を実施した。事前の在籍校との打ち合わせにより、交流学級を決め、体育祭の練習をする授業にも参加した。
- 学級の生徒には事前に説明を行ったが、Eさんが、小学部段階から居住地校交流を行っていたことや、地域で日常的に接していることもあり、多くの生徒がEさんのことを知っていた。さらに、あたたかな気持ちで迎えられるよう指導を行った。
- 体育祭の練習では、教室から体育館への校内移動に思ったより時間がかかったが、体育の授業をじっと見つめるなど、在籍校では得られない同年代の生徒たちの動きに刺激を受けていた。
- 体育祭当日は、交流学級席に着席し、最初は緊張して、しばらくの間じっとして動かなかったが、生徒が渡した応援旗をふりかざしたりして、途中から実に機嫌良く応援らしい動作を見せ始めた。周囲の生徒たちも、呼応するかのようになり、共に声を出して学級の選手への応援を行った。

(4) 特別支援学校(肢体不自由)児童の交流教育

1 副学籍による交流教育の開始

- ・小学部3年生の児童のFさんの保護者から、副学籍の「案内リーフレット」を見て、前年度に引き続き居住地の小学校と副学籍による交流をしたいとの希望があった。特別支援学校は希望する児童について教育委員会に連絡し、教育委員会から送付された「指定通知書」を保護者に手渡した。
- ・保護者と特別支援学校との話し合いの結果、特別支援学校及び小学校双方の児童が新しいクラスに馴染むのを待って、5月から、Fさんの体調に配慮しながら、月1回程度の交流を開始することとし、両校が協議を行った後、「副学籍による交流教育計画書」を双方で作成し、これを教育委員会に送付し、交流教育を開始した。

2 実施のための事前準備や配慮など

事前打ち合わせ

- ・特別支援学校担任が副学籍校を交流開始前に訪問し、Fさんの障害等の状況、通学方法、学習等の状況、保護者の願い等について説明した。また、学校内を見学し、特に想定される活動場所と移動ルートを確認した後、車椅子の介助方法や階段昇降の手立て、おむつ交換の場所など、交流時に必要となる配慮等について具体的に確認した。

交流教育計画書の作成

- ・その後、双方の学校行事や教育計画と照らし合わせながら、「交流学級」や、初回の日程、学習内容等について確認し、年間の交流計画書を作成した。
- ・最初の交流日には、在籍校担任がFさん、保護者とともに学校に行き、学年集会で双方の担任がFさんを児童へ紹介した。

交流教育推進の窓口

- ・小学校では、特別支援教育コーディネーターが交流教育の窓口となり、毎月開催される校内委員会を活用して、交流学級の決定、実施状況の報告や協議を行っている。
- ・特別支援学校では、担任が学部会において交流状況を定期的に報告し、交流内容や児童の状況、支援の方法などについて協議し、内容の改善に努めている。また、校内委員会において、交流教育に関する現状と課題を集約し、学校としての改善の方策を検討している。

学校だより等の提供

- ・小学校の学校だよりや行事のお知らせ等については、交流時等に確実に本人・保護者に渡すようにするとともに、両校がお互いの学校に送付することとし、情報の共有に努めている。

その他

- ・小学校担任が特別支援学校の学習発表会などを参観し、児童の在籍校での活動の様子を把握し、その様子を交流時に学級の児童に紹介した。
- ・小学校の教職員が、特別支援学校の教育について理解を深めるために、校内研修の時間を利用し、在籍校が作成した学校紹介ビデオを視聴した。

3 小学部Fさんの交流教育の様子

Fさんは、脳性まひによる四肢体幹機能障害があり、自力移動及び椅子座位保持が困難なため、常時車椅子を使用している。言語によるコミュニケーションは不十分だが、表情や発声で感情や意思を表出する。保護者の希望もあり、行事や特別活動を中心として普通学級において交流することとした。

登下校に、自家用車を利用することから、学校敷地内に駐車スペースを確保した。前年度も交流を行っていたことから、副学籍校の児童はFさんのことを知っており、車椅子の介助経験のある子どもが多かったが、学年集会の時間に初回の交流を行い、在籍校の担任と保護者からFさんの紹介と車椅子の操作方法など最低限の注意について伝えた。

校内の移動については、保護者または在籍校の担任が必ず付き添うが、副学籍校の児童が、自発的に車椅子を押している。エレベーターが設置されていないため、2階の教室への移動は、保護者または在籍校の担任と副学籍校教職員が車椅子ごと持ち上げている。副学籍校の児童も補助的に車椅子を支えたり、荷物を持ったりして階段昇降を手伝っている。

交流は、副学籍校の教育課程を基本として、事前に在籍校の担任及び保護者に学習予定等が連絡され、当日になって困らないような配慮がされている。

体育の時間における集団演技の練習を交流計画に組み込み、運動会には、体調に配慮して午前中のみ、交流級の一員として参加した。入退場では、交流校の児童が車椅子を押し、演技では、在籍校の担任が介助を行った。

音楽の時間の交流では、Fさんにきれいな声を聞いてもらおうと、子どもたちが張り切って合唱し、「Fさんどうだった?」「はじめは驚いたようだったけど、聞いているうちにだんだん優しい顔になったよね。上手に歌えたと思ってくれたかな?」などの問いかけがなされた。Fさんは、友だちからの話しかけには、視線を向け、にこやかな表情を見せたり、声を出したりするなどして応えたりしている。

休み時間には、数名の子どもたちが、Fさんを囲み、いろいろなことを話かける姿が見られる。

Fさんの体調に配慮し、交流時間は午前中の2～3時間としており、Fさんの健康状態が懸念されたり、副学籍校で風邪が流行しそうな時などは、交流を中止することもある。

交流の回を重ねる毎に、地域で出会った時に、交流学級の子どもから声をかけられることが多くなってきた。また、近隣の子どもたちが放課後、図工の作品を見せたり、音読を聞かせたりしに、自宅へ遊びにくることもある。

小学校の担任の先生によると、子どもたちが、障害者に関する話題やニュースに敏感になったり、障害のある子どもたちが学ぶ学校に対する興味が高まったりしているとのことで、特別支援学校の先生と相談しながら、機会をみて、授業でも取りあげていきたいと考えてるとのことである。

(5) 特別支援学校 (病弱) 児童生徒の交流教育

1 副学籍による交流教育の開始

・小学部5年生のGさん及び中学部2年生Hさんの保護者から、退院が間近となってきたので、居住地の前籍校(以下、副学籍校と表す)である小中学校に交流をしたいとの希望があった。在籍校において、「個別の教育支援計画」等をもとに、前籍校への復学のための段階的な交流内容について、保護者との話し合いを行った。両校が協議を重ねた後、「副学籍による交流教育計画書」を双方で作成し、これを教育委員会に送付し、交流教育を開始した。

2 実施のための事前準備や配慮など

事前打ち合わせ

・在籍校担任が副学籍校を交流開始前に訪問し、Gさん、Hさんの病状や入院中の学習の状況等について説明した。養護教諭とも話し合い、交流中の健康管理について特に確認を行った。

「交流教育計画書」の作成

・「交流学級」(前在籍学級)や初回の日程や学習内容等について確認し、年間の「交流教育計画書」を作成した。

交流初日には、念のため、学級担任が本児、保護者とともに学校に行き、当該の学級児童生徒に紹介した。

交流教育推進の窓口

・副学籍校では、特別支援教育コーディネーターが交流教育の全体窓口となっているが、Gさん、Hさんの場合、入院治療前まで通学していた児童生徒であり、学級担任が直接の窓口となって校内委員会を活用して、具体的な対応を行っている。

・特別支援学校では、担任が職員連絡会において交流状況を報告し、病状と交流内容の状況、Gさん、Hさんの回復の様子などについて確認を行った。

学校だより等の提供

・小中学校からの学校だより等については、確実に本人に渡し、児童生徒が復帰しやすい学習環境づくりに努めている。



3 小学部Gさん、中学部Hさんの交流教育の様子

Gさんは心臓疾患により、半年間の入院治療生活を送っていた。ようやく病状も回復し、安定し始めたので、主治医から、前籍校への復帰準備にかかるよう話を受けた。Gさん、保護者共に大いに喜び、前籍校に早速、在籍校より交流の希望を伝えた。前籍校でも、病状回復を歓迎し、復帰のための教育計画を在籍校と相談することになった。

在籍校では、入院中の学習状況について説明を行い、副学籍校の授業内容との整合性を図る必要から、準備期間を1週間設け、その期間に、副学籍校の授業の進度に合わせた内容を復習および予習をすることにした。

交流当日、Gさんは気持ちが高ぶったまま、病院から副学籍校に通学した。学級の仲間から回復を祝福され、笑顔で授業を開始したが、3時間目の途中では、やや気分がすぐれず、保健室で1時間休養をした。4時間目に教室に戻り、授業を受け、給食前に病院に戻った。

2日目、3日目と重ねる内に、交流時間が長くなり、復学へ向けて段階的な交流の成果が見え始めてきた。1ヶ月の交流期間のうちに、病状もすっかり良くなり、来週月曜日の退院を告げられた。

Hさんは、3ヶ月程前から思春期特有の心の不安定さが見られたため、入院治療を行った。カウンセリングや服薬、静養により、ここ2週間ほど、回復の兆しが見え始めた。主治医からは、前籍校であるC中学校への復帰を目指し、少しずつ交流を行ってはどうかとの話があった。本人への確認、保護者とも相談を行い、病院からC中学校に、まず、週2日程度の交流から段階的に行うこととした。

交流級は、副学籍校の2年4組が前籍の学級であり、仲間に入っていくやすい学級活動から始めることとした。最初は緊張がありありと見え、ぎこちなさが目立った。学校の子どもたちも、久しぶりのHさんに対して、どう声をかけてよいか戸惑っている様子が見られた。。

第2週目に入り、教科学習の交流を始めた。国語と英語、数学の授業を受けた。英語の会話のやりとりでは、自信なさげに発音していたが、入院中の学習のせい、極端な学習の遅れは見られなかった。Hさんも安心していただけだった。

第4週目、来週は退院ということもあり、交流は日常の学校生活と同様の日程で行われている。どうやらHさんも退院後は、前籍校である中学校に、安心して通学できそうである。

